

学校図書館司書講習受講生による「調べ学習」の試み

後藤 弘子

はじめに

昨年8月18(月)日から22(金)日の間、大分大学で学校図書館司書講習(「学校経営と学校図書館」)を担当した。一昨年の夏、教員研修センターの委託事業で小・中学生の調べ学習にかかわったが、参加した教師の指導に多少疑問に思うところがあり、36人の受講生に調べ学習を取り入れてみた。20コマのうち7コマをさいて、調べ学習に充てた。18日4限～予告及び課題例、活動予測。19日3・4限～課題の確認・班決定・計画・役割分担、20日3・4限～実践、21日3・4限～実践・まとめ・レジュメ作成、22日3・4限～練習・中間発表会・反省・まとめという展開を考えた。19日は課題と計画の発表・質疑・助言、20・21日は各班の進度確認とすり合わせ・助言の時間を、それぞれ4限に30分ずつもった。

課題は、「学習指導と学校図書館」や「読書と豊かな人間性」で扱うほうが適切だと考えられるものもあったが、時間も限られており、意欲を大切にそのまま認めた。また、当初学生と教師(校種別)を分けようと考えたが、学生・院生の意欲が非常に高かったことと教師が多様な校種の集まりだったため、またとない異年齢交流の場だととらえなおして、混成で編成した。

1 活動の実際

まず、発表順(希望による)にテーマと内容、班構成を記す。

- ①「大豆から、私たちの食を考える」(大学生4 中学校教師1 農業高校教師1)
小(低・高別及び各交流)・中・高別に、発達段階に応じた調べ学習の展開を考える。
大豆の栽培、観察日記、収穫祭。使途の変化と生産。遺伝子組み換え問題など。
- ②教育に新聞を！NIEの教育(学2 非常勤講師小1 定時制高1)
受講生へのアンケート結果の分析及び大分県におけるNIEの実践～森高校を中心に新聞教材の活用方法と期待される教育効果
- ③新学習指導要領をふまえた学校図書館の有効利用—想像を広げて読み進めるためには—(学1 院1 小1 聾1)
新学習指導要領研究から「めざす子ども像」「仮説」を設定
それをふまえた合科的指導(国語・図工・音楽・道徳・総合)を取り入れた『ごんぎつね』の授業実践計画づくり
- ④本を読まない子にどう働きかけるか—フィンランドと日本の図書館利用を比べて—(学3 小2 中1)
フィンランドと日本の図書館の建築・機能・活動の相違点
ロールプレイによる不読児不読生の事例と対策の提案
- ⑤学校図書館の施設・環境づくり—学校図書館の取り組み事例から—(学3 院1)

- 施設・環境づくりの優れた学校図書館紹介と班員で考えた理想の図書館配置図作成
- ⑥子どもにとって理想の図書とは ―課題図書は理想の図書か― (学2)
- 課題図書選考基準 読書感想文コンクール おとなの理想と子どものニーズの比較
以上をふまえた司書教諭・教諭の課題とは
- ⑦発達に障害のある子への読み聞かせを中心とした本への親しませ方 (学4 養2)
- 養護学校における読み聞かせの実態～五感に訴えるということ・本の選択基準
実践例①『大きなかぶ』(知的障害養護学校)
- ②『ダウトをさがせ』『ぐりとぐら』(情緒障害学級)
- ⑧『大きなかぶ』からわかる教科書会社のねらい (学1 小3)
- 作者・指導時期・文章表現・挿絵の視点から学校図書・東京書籍・教育出版・光村
図書・大日本図書各社の教科書を比較検討する。
- 相違点・共通点から子どもに何を学ばせたいのか、効果はどうかを考察する。

「調べ学習」の展開を顧みる。

学生の大半が講習終了後直ちに関東・関西方面の教員採用試験に出発するため、⑤⑥班は学生のみとなった。調べ学習にエネルギーを使いたくない気持ちはよくわかった。しかし、焦点化された課題であっても、次第にそれぞれの課題の奥の深さに「はまってしまった」ようだった。気心の知れた仲間と役割分担もスムーズで、他の混成班と違い和気藹々とスタートしていたが、最後には全員「今度機会があったらぜひ異年齢交流で、現職の先生方に学びたい」と記していた。一方混成班ははじめ互いにぎこちなく、役割分担も遠慮しあって、活動が軌道にのるまで時間がかかった。うまくいくのかどうか不安で、指導者として落ち着かなかった。しかし、学生にとっては教師から現場の実態や積み上げた実践の知恵を学ぶ場であり、教師にとっては学生をリードすることを通して、自身のこれまでの指導のありようを省みたり、若い感性やフットワークのよさに元気をもらったりで、双方にとって実り多い経験になったようだ。③班の学生が「僕、現場に出たら、絶対『ごんぎつね』の研究授業をやる！」というので、教師二人が「そのときはぜひ連絡して。見に行くから。」と応じたり、②班の非常勤講師の教員採用試験1次合格をともに喜び合う姿、④班のロールプレイで、朝読書に取り組まない部活動生の演技に注文をつけたり、熱演を称えあったり等々、広い講義室に快活で温かい空気が満ちてくると、杞憂に過ぎなかったという安堵感がわいてきた。8グループそれぞれの活動を支援するため図書館と講義室を駆け回った疲れも吹っ飛んだ。

2日目は部屋に大学図書館・市民図書館・勤務校図書室・個人の本、教科書やコピーがあふれ、3日目にはパソコンが増えた。4日目には報告とまとめの話し合い、FD・DVD・OHC・マジックペンや模造紙等を使った作業、早い班のリハーサルと展開した。3～4日目は特に仮説・検証・結論の首尾一貫性を、班員一人ひとり論理的・批判的に吟味するよう指示した。それぞれの活動を集約し、課題は十分とはいえなくても一応検証されているのか、

を吟味し、軌道を修正する。著作権に配慮し、出典を明記することも再度促した。5日目は発表プログラムを兼ねて感想を記録する手引きを用意した。5日間全体を振り返っての感想・評価の手引きとあわせて読み返してみると、受講生の活動の実態が見えてきた。

2 成果と課題

感想や評価の手引きから受講生の声を拾ってみる。

(1) 成果（といえるほどのことではないが・・・）

- ・調べ学習がこの講義に入ってきてびっくりしたが、日が経過するにつれて、午前中の講義にすべて繋がっていることが少しずつわかってきた。
 - ・わが子と年が近い学生とともにひとつのことを追求してみて、その感覚の斬新さに驚いた。各々の世代の考えをすり合わせていくことで、短期間で自分が大きく変わったことに感動を覚えた。
 - ・発表の最後に“理想の図書館”ということで、“ドリーム図書館”というものを作成したが、その過程が楽しかった。夢のような図書館を夢の詰まった図書館へ実現できるよう、まず採用試験、がんばってきます。
 - ・中間発表という方法が印象的でした。まだ結論までは見えないが、現時点でわかっていることを明確にし、今後の方向性をはっきりさせるために意義あることとわかりました。（筆者注；他班の発表に学んで、よりよい本発表のありようを模索し続けることにも意義があり、大村はま単元学習の実践では、ここまでで単元を終えた事例もある。学習者は他者に学んで、次の単元での自己の課題を発見し、大きく飛躍する。）
 - ・調べ学習は調べ方さえわかっているならば、トコトンはまってしまうと思います。わからなかったことがわかり、どんどん知りたくなる、底がないような気がします。教師になったら、積極的に取り入れていきたいと思っています。
 - ・追究課題と調べたこと、考えたことの一つひとつがぶれないよう思考していくことが大変だった。ひとつのことばについて、深く深く思考を重ねていった、そういう自分を自分でほめたい！普段の授業でそれができているか、深く反省させられた。
 - ・大村はま先生の「子どもと一緒に作り上げる授業」の実践例に出会えたように思います。（筆者注；ありがたいことばだと思う。が、はま先生のご実践は、学習者一人ひとりの学力の実態に即して、つけたい力を考え、周到なご準備と稠密なご計画のもとに展開された単元展開である。今回の実践は先生の足下にも及んでいない。はま先生のすごさを、ほんとうに学んでいない、わかっているから、こういうことを書く・・・ということだと思う。）
 - ・4年生の10月から特別支援学校で教育実習があり、実際に調べたことを授業の中に組み込んでみたいと思っています。実践を通して、深く考えたいと思っています。
- 受講生のメディア活用能力はすばらしかった。特に次のことばが印象に残っている。
- ・一番有効なメディアは、今回めぐり合った現場の先生方です。

- ・毎日立ち寄った勤務校での同僚（教師）の助言が、最も有効なメディアであった。
- ・作業の中で、学生さんが、本当に機器の活用がうまく、思考も柔軟で、わが子もこんな利発な学生に成長してほしいと思いました。

確かに、教師・学生ともに情報を収集し取捨選択して再構築する力、メディア活用能力はすばらしかった。限られた時間を最大限有効に使う手際のよさ、コミュニケーション能力のたくましさには感動した。これまで、「3限は眠くなり、4限は疲れ果てのパターン」ではなかったようで、調べ学習の奥行きの高さ深さ、その一端は伝ええたようである。

（2）残された課題

課題の焦点化が十分でなく、短期間であったため、あちこち掘り起こしただけに終わった班もある。主題統一力のなさが目立った。

しかし、「司書教諭は、本の分類等を行うだけだと思っていましたが、学校のあらゆる場で活躍する仕事なのだ」と初めて知った・・・学校に帰って、焦らず、気長にできることから始めたい。」と書かれたベテランの教師もいたのだから、それなりの成果はあったと思いたい。現実と望ましい司書教諭像との隔絶にたじろぐ。芭蕉ではないが、日暮れて道遠し。

- ・プレゼンテーションに慣れていないため、発表に倍の時間を費やしても平気。限られた時間をどのように有効に使うか、メリハリのある展開を考えて構成させる必要がある。また、全体の流れを掌握するリーダーが要る。リーダーシップを発揮できる教師のいたグループは抜きん出ている。（本人は出すぎた、と自分を責めていたが。）
- ・悪しき平等主義で班員の役割を平等に分割し、内容や構成から適材適所を考えようとしない。（小・中学校の研究授業でこれをやられると、指導者の資質を疑いたくなる。）
- ・話し手の課題は聞き手と交流を求めていこうとする語り口、声のトーンの工夫。活舌。

聞き手としての課題は聞き浸る力。また集中して、思考し吟味しながら訊く態度。

小学校や特別支援学校教師は、学生に比較して「一度で聞き取らせよう」「理解し納得させて行動へ導こう」という日常実践の積み重ねとその成果が抜群にすばらしい。

やはり、教師自ら調べ学習やそのプレゼンテーションを体験することによって、体を当した実感の中で指導力・教師力を高めていくことが、司書教諭として、まず大切なことではなかろうか。今回の調べ学習のささやかな経験が、実践の場に活かされれば幸いである。

図書館資料を有効に収集保存する司書教諭、児童生徒さらに教員の利用に積極的にかかわり、教育課程の展開に意欲的計画的に働きかけていく司書教諭、それらを通して自らもとめて学ぶ児童生徒（教師をも）を育成し、個々の自己確立を促す司書教諭が育つのは容易ではない。校長や教頭、同僚だけでなく、行政や保護者、ボランティアに学校図書館の運営責任者として言うべきときにきちんと言い、交渉し、説得し、理解と協力を確保していくためには専任制でなければ、と考える。経験豊富で実践力のあるスペシャリストを意図的に育てていくことは、即次世代の思慮深い認識主体を育成することである。教育現場の実態を考えれば、これは、焦眉の急といっても過言ではない。前途は、多難である。

（ごとう・ひろこ 別府大学非常勤講師）